

## 応用マトリックス代数

その 2 / 小松 定夫\*

### (6) 高次固有値の計算法

振動問題においては、高次固有振動数および固有振動モードが知りたいことがある。そのようなときには、高次固有値  $\omega_j (j \geq 2)$  を計算せねばならない。この問題については、J. Koch, H. Wielandt, H. Hoelling などの研究がある。本文においては、Koch の方法について述べる。

いま任意のベクトル  $x$  を対称行列  $A^{-1}$  の正規化された固有ベクトルで展開すると

$$x = C_1 x_1 + C_2 x_2 + \dots + C_n x_n \quad \dots\dots\dots (a)$$

ここに展開係数  $C_j$  は

$$C_j = x_j^T x \quad \dots\dots\dots (3.33)$$

として与えられる。

そして、固有値の間で  $|\omega_1| < |\omega_2| < |\omega_3| < \dots$  の関係があるものとする。

そこで、次式によって  $x_1$  の項を消して  $v$  なるベクトルを導入する。

$$v = x - C_1 x_1 \quad \dots\dots\dots (3.34)$$

そして

$$Z = A^{-1} v \quad \dots\dots\dots (3.35)$$

を計算すると次式で正規化されたベクトル  $x$  の第 2 近似を得る。

$$x = Z / |Z| \quad \dots\dots\dots (3.36)$$

式 (3.36) を式 (3.33) に代入し、再び式 (3.34), (3.35), (3.36) の計算により  $x$  の第 3 近似を得る。このように、式 (3.33) から (3.36) の計算を反復すると、 $z$  はついに  $\omega_2 x$  に収束することは容易にわかる。

これと同時に、ベクトル  $x$  は 2 次固有ベクトル  $x_2$  に収束する。したがって、2 次固有値  $\omega_2$  を知ることができる。

この場合にも、Rayleigh の商が固有値  $\omega_2$  の良好な近似値  $\theta_2$  を得る。

$$\theta_2 = \frac{z^T z}{z^T x} \quad \dots\dots\dots (3.37)$$

さらに、第  $k$  次固有ベクトルおよび固有値については、次式を式 (3.33)~(3.35) のかわりに使えばよい。すなわち、すでに求められた  $x_j (1 \leq j \leq k-1)$  を用いて

$$C_j = x_j^T x \quad \dots\dots\dots (3.38)$$

$$v = x - (C_1 x_1 + C_2 x_2 + \dots + C_{k-1} x_{k-1}) \quad \dots (3.39)$$

$$z = A^{-1} v \quad \dots\dots\dots (3.40)$$

を繰返し計算に用いるとよい。

### (7) 行列の冪の固有ベクトルと固有値

行列  $A$  が固有ベクトル  $x_i$  と固有値  $\lambda_i$  を有するとき、冪  $A^p$  の固有値問題について考える。

仮定により  $Ax_i = \lambda_i x_i$  である。これに左から順次  $A$  を乗じてゆくと、

$$\left. \begin{aligned} A^2 x_i &= \lambda_i A x_i = \lambda_i^2 x_i \\ A^3 x_i &= \lambda_i A^2 x_i = \lambda_i^3 x_i \\ &\dots\dots\dots \\ A^p x_i &= \lambda_i^p x_i \end{aligned} \right\} \quad \dots\dots\dots (3.41)$$

式 (a) は行列  $A$  の冪  $A^p$  が固有ベクトル  $x_i$  を有し、固有値  $\kappa_i = \lambda_i^p$  を有することを示す。行列  $A$  が正則であれば、 $p$  が負の整数の場合にも同様のことが成立つ。

次に、行列  $A$  の  $p$  次多項式

$$B_p = f_p(A) = a_0 I + a_1 A + a_2 A^2 + \dots + a_p A^p \quad \dots\dots\dots (3.42)$$

は  $A$  と同じ固有ベクトル  $x_i$  を有し、固有値として

$$\kappa_i = f_p(\lambda_i) = a_0 + a_1 \lambda_i + a_2 \lambda_i^2 + \dots + a_p \lambda_i^p \quad \dots\dots\dots (3.43)$$

を有することは、式 (3.40) の両辺にそれぞれ係数  $a_1, a_2, \dots, a_p$  を乗じ辺々加え合せることにより容易に証明できる。

## 4. 行列の級数と行列方程式

### (1) 行列の冪級数

いま、行列の多項式  $B$  において  $p$  を無限大としたとき、すなわち

$$\begin{aligned} F &= f(A) = a_0 I + a_1 A + a_2 A^2 + \dots + a_p A^p + \dots \\ &= \lim_{p \rightarrow \infty} B_p \quad \dots\dots\dots (4.1) \end{aligned}$$

を行列  $A$  の冪級数という。式 (3.41) から容易に

$$\kappa_i = \lim_{p \rightarrow \infty} f_p(\lambda_i)$$

とおけば

$$F x_i = \kappa_i x_i \quad (i=1, 2, \dots, n) \quad \dots\dots\dots (4.2)$$

したがって、 $\lim_{p \rightarrow \infty} f_p(\lambda_i)$  が収束して極限值  $\kappa_i$  を有するときには、行列  $A$  の冪級数  $F = f(A)$  は収束する。

\* 正会員 工博 大阪大学教授 工学部土木工学科

そして、 $F$  は  $A$  と同じ固有ベクトル  $x_i$  を有し、その固有値は  $\kappa_i$  である。

また、もし行列  $A$  の固有値  $\lambda_i$  が固有方程式の  $k$  重根である場合には、 $(k-1)$  次の導関数。すなわち、 $\lim_{p \rightarrow \infty} f_p^{(k-1)}(\lambda_i)$  がすべての  $\lambda_i$  に対して収束するとき、冪級数  $F$  は収束する。

任意の有限値  $x$  に対して、関数  $e^x, \cos x, \sin x$  などの冪級数展開は収束するので、これらと同形の行列級数は収束する。そこで、それらの級数を関数表示し

$$eA = I + A + \frac{1}{2!} A^2 + \frac{1}{3!} A^3 + \dots \quad (4.3)$$

$$\cos A = I - \frac{1}{2!} A^2 + \frac{1}{4!} A^4 - \dots \quad (4.4)$$

$$\sin A = A - \frac{1}{3!} A^3 + \frac{1}{5!} A^5 - \dots \quad (4.5)$$

とし、行列  $A$  の指数関数、余弦関数、正弦関数と定義する。

また、たとえば、二項級数

$$f(x) = \frac{1}{1-x} = 1 + x + x^2 + x^3 + \dots$$

は、領域  $|x| < 1$  において収束する。すなわち、収束半径  $r=1$  の内部において収束する。したがって、行列  $A$  の固有値  $\lambda_i$  がすべて  $|\lambda_i| < 1$  ならば、行列級数

$$(I - A)^{-1} = I + A + A^2 + A^3 + \dots \quad (4.6)$$

は収束する。

同様に、行列  $A$  の固有値  $\lambda_i$  がすべて  $-1 < \lambda_i \leq 1$  の領域にあるとき

$$\log(I + A) = A - \frac{1}{2} A^2 + \frac{1}{3} A^3 - \dots \quad (4.7)$$

は収束する。

一般に、 $x$  の級数  $f(x)$  の収束半径を  $r$  とすると、行列  $A$  のすべての固有値  $\lambda_i$  が  $|\lambda_i| < r$  であれば、行列級数  $f(A)$  は収束する。もし、 $\lambda_i$  が固有多項式の  $k$  重根であれば、 $f^{(k-1)}(x)$  の収束半径  $r_k$  として、 $|\lambda_i| < r_k$  ならば  $f(A)$  は収束する。

## (2) 行列微分方程式

次の1階の行列微分方程式を満足する解  $z(x)$  を求めよう。

$$\frac{dz}{dx} = Az + g(x) \quad (4.8)$$

ここに、

$$z = \{z_1(x); z_2(x); \dots; z_n(x)\}$$

$$A = (a_{ij}) \quad n \text{ 次正方行列}$$

$$g(x) = \{g_1(x); g_2(x); \dots; g_n(x)\} \quad (4.9)$$

列ベクトル  $g$  の要素がすべて  $x$  の既知関数として与えられている場合に、微分方程式 (4.8) を満足する  $x$  の関数  $z_1(x), z_2(x), \dots, z_n(x)$  を要素とする列ベクトル  $z$  を求めるには、まず方程式 (4.8) に Laplace 変換

$$\bar{z}_i(s) = \int_0^s e^{-sx} z_i(x) dx \quad (4.10)$$

を施すと

$$s\bar{z} - z_0 = A\bar{z} + \bar{g}(s)$$

ここに、

$$\bar{z} = \{\bar{z}_1(s); \bar{z}_2(s); \dots; \bar{z}_n(s)\} \quad (4.11)$$

$$z_0 = \{z_1(0); z_2(0); \dots; z_n(0)\} \quad (4.12)$$

$$\bar{g}(s) = \{\bar{g}_1(s); \bar{g}_2(s); \dots; \bar{g}_n(s)\} \quad (4.13)$$

よって

$$\bar{z} = \frac{1}{s} \left( I - \frac{1}{s} A \right)^{-1} [z_0 + \bar{g}(s)]$$

式 (4.6) を用いて行列級数に展開すると

$$\bar{z} = \left( \frac{I}{s} + \frac{A}{s^2} + \frac{A^2}{s^3} + \dots \right) [z_0 + \bar{g}(s)]$$

そこで、右辺に Convolution の定理を適用して逆変換し、さらに式 (4.3) を使えば、

$$z = eAxz_0 + eAx \int_0^x e^{-A\xi} g(\xi) d\xi \quad (4.14)$$

式 (4.14) で与えられる  $z$  が行列微分方程式 (4.8) の解である。

[例] 変断面ばりの強制振動

(1) 等分布強制力：強制力  $q(t) = q \sin \omega t$  が作用する区間ごとに、一定断面の変断面ばりの振動について考える。一般に、振動中のはりの状態ベクトル

$$z = \{y; \alpha; M; Q\} \quad (4.15)$$

については方程式 (4.8) が成立している。ただし、係数行列  $A$  および既知項  $g$  については、

$$A_j = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -\frac{1}{E_j I_j} & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ -\frac{W_j}{g} \omega^2 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$g = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ -q \end{pmatrix} \sin \omega t \quad (4.16)$$

ここに、添字  $j$  は第  $j$  区間の値を表わす。

そこで、方程式 (4.8) の解 (4.14) を次のようにかける。

$$z_j = \bar{z}_j \sin \omega t, \quad g = \bar{g} \sin \omega t \quad (4.17)$$

として、第  $j$  区間の終端  $j$  における状態ベクトルは

$$\bar{z}_j = U_j \bar{z}_{j-1} + U_j A_j^{-1} (I - U_j^{-1}) \bar{g} \quad (4.18)$$

ここに

$$U_j = eA_j t_j,$$

$$A_j^{-1} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & -g/W_j \omega^2 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & -E_j I_j & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} \quad (4.19)$$

で  $U_j$  は第  $j$  区間の遷移行列である。 $l_j$  は第  $j$  区間の格間長である。

(2) 集中強制力: 第  $j$  区間において格点  $(j-1)$  から距離  $C_j$  の位置に集中強制力  $P_j$  が作用する場合には,

$$\tilde{z}_j = U_j \tilde{z}_{j-1} + U_j e^{-A_j C_j} \tilde{P}_j \quad (4.20)$$

ここに,

$$\tilde{P}_j = \{0; 0; 0; -P_j\} \quad (4.21)$$

特に, 集中荷重  $P_j$  が格点  $j$  に作用する場合には,  $e^{-A_j C_j}$  は  $U_j^{-1}$  となるので,

$$\tilde{z}_j = U_j \tilde{z}_{j-1} + \tilde{P}_j \quad (4.22)$$

### (3) 行列関数

与えられた行列  $A$  の固有方程式の  $s$  箇の相異なる根  $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_s$  とするとき, 固有多項式は,

$$m(\lambda) = (\lambda - \lambda_1)^{\mu_1} (\lambda - \lambda_2)^{\mu_2} \dots (\lambda - \lambda_s)^{\mu_s} \quad (4.23)$$

で与えられる。いま, 行列  $A$  の  $p$  次多項式を  $f_p(A)$  とするとき,  $p \geq m$  の場合には,

$$f_p(\lambda) = m(\lambda)g(\lambda) + \varphi(\lambda) \quad (4.24)$$

ここに  $g(\lambda)$  は商,  $\varphi(\lambda)$  は剰余で  $\lambda$  の  $m-1$  次以下の多項式である。

すると明らかに,  $m(A) = 0$  であるから,

$$f_p(A) = \varphi(A) \quad (4.25)$$

いま, 1つの固有値  $\lambda_j$  が  $\mu_j$  重根である場合には,

$$m_j(\lambda) = m(\lambda) / (\lambda - \lambda_j)^{\mu_j} \quad (4.26)$$

とおくと,  $\varphi(\lambda)$  は

$$\begin{aligned} \varphi(\lambda) = & \sum_{j=1}^s \left\{ F_j + F_j'(\lambda - \lambda_j) + \frac{1}{2!} F_j''(\lambda - \lambda_j)^2 + \dots \right. \\ & \left. + \frac{1}{(\mu_j - 1)!} F_j^{(\mu_j - 1)}(\lambda - \lambda_j)^{\mu_j - 1} \right\} m_j(\lambda) \end{aligned} \quad (4.27)$$

ここに,

$$F_j(\lambda) = \frac{f_p(\lambda)}{m_j(\lambda)} \quad (4.28)$$

$$F_j^{(\nu)} = \left[ \frac{d^\nu F_j(\lambda)}{d\lambda^\nu} \right]_{\lambda = \lambda_j} \quad (4.29)$$

結局, 式 (4.27) を式 (4.25) に代入すれば,

$$\begin{aligned} f_p(A) = & \sum_{j=1}^s \left\{ F_j + F_j'(A - \lambda_j I) + \frac{1}{2!} F_j''(A - \lambda_j I)^2 \right. \\ & \left. + \dots + \frac{1}{(\mu_j - 1)!} F_j^{(\mu_j - 1)}(A - \lambda_j I)^{\mu_j - 1} \right\} \\ & \times m_j(A) \end{aligned} \quad (4.30)$$

いま, 行列関数  $f(A) = \lim_{p \rightarrow \infty} f_p(A)$  については,

$f(\lambda) = \lim_{p \rightarrow \infty} f_p(\lambda)$  が存在するとき, 式 (4.30) の右辺において

$$F_j(\lambda) = \frac{f(\lambda)}{m_j(\lambda)} \quad (4.31)$$

とおけば, 式 (4.30) によって  $f(A)$  が与えられる。

特に,  $\lambda_j$  がすべて単根の場合には,

$$f(A) = \sum_{j=1}^s \frac{f(\lambda_j)}{m_j(\lambda_j)} m_j(A) \quad (4.32)$$

として与えられる。そこで, 代表的な行列関数については次のとおりである。

$$e^A = \sum_{j=1}^s \frac{e^{\lambda_j}}{m_j(\lambda_j)} m_j(A) \quad (4.33)$$

$$(I - A)^{-1} = \sum_{j=1}^s \frac{1}{m_j(\lambda_j)} \frac{1}{1 - \lambda_j} m_j(A) \quad (4.34)$$

$$\log(I + A) = \sum_{j=1}^s \frac{\log(1 + \lambda_j)}{m_j(\lambda_j)} m_j(A) \quad (4.35)$$

[例]  $A = \begin{bmatrix} 4 & 3 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}$  の指数関数  $e^A$  を求めよ。

固有多項式は,  $m(\lambda) = (\lambda - 4)(\lambda - 1)$

$$\lambda = 4: m_1(\lambda) = \lambda - 1, m_1(\lambda_1) = 3$$

$$\lambda_2 = 1: m_2(\lambda) = \lambda - 4, m_2(\lambda_2) = -3$$

よって公式 (4.33) に代入すると,

$$e^A = \frac{e^4}{3}(A - I) - \frac{e}{-3}(A - 4I) = e \begin{bmatrix} e^3 & e^3 - 1 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}$$

## 5. トポロジーの行列表示

構造物の骨組に含まれるトポロジー的性質を構造物の弾性的性状や幾何学的形状から切り離し, 抽出されたトポロジー的特性を利用することによって, 線形構造解析を統一化し, 簡素化しようとするアプローチが多くの人々によってすすめられた。Kron, DiMaggio, Spillers, Fenves, Branin, Lind, Stewart, Baty などがそれらの先駆者である。

構造物の骨組をグラフによって表わした場合, そのトポロジー的性質を抽出して構造解析に利用するために, 種々な基本的な行列が組み立てられる。すでに, 本講座7において, 代表的なものについて解説がなされた。ここでは構造解析に用いられる若干の基本行列を追加し, さらにどのような形でそれを組立てると都合がよいか, また構造解析上重要な行列の性質について述べる。記号は本講座7(グラフの理論)を参照されたい。

### (1) トリーとコードの分離

図-2(1)(2)(3)に示すラーメンをグラフで表わせば, すべて同じく図-3のようになる。このとき, ラーメンの柱脚に対応する節点は, グラフ上では1つの節点  $n_0$  に集約させねばならない。そして, これを基準節点に選ぶ。基準節点は, 枝路接続行列  $D(d_{ij})$  から除外するのが普通である。すると, 行列  $D$  の行ベクトルは互いに一次独立である。行列  $D$  の構成は次のようにする。図-3(1)のグラフのトリーに含まれる枝路の箇数を  $n$ , コードの箇数を  $m$  とすると, 行列  $D$  を太線で示すトリーに対応する  $n$  次正方行列  $D_t$  と細線で示すコードに対応する  $(n, m)$  型行列  $D_c$  とに分解するこ

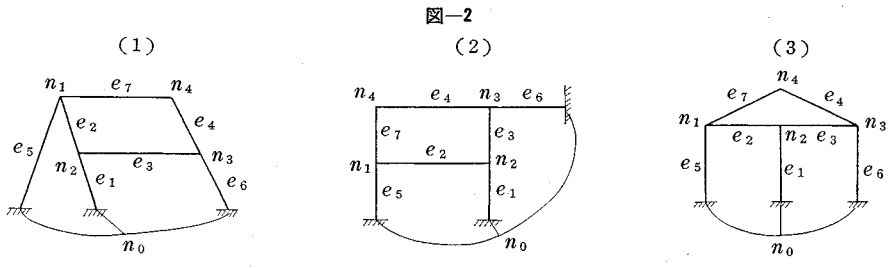


図-2

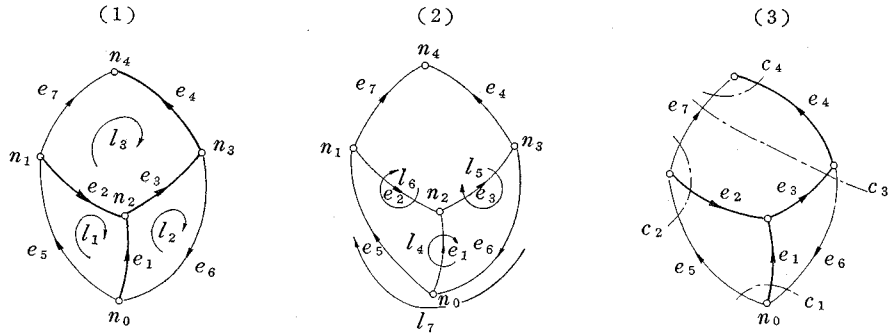


図-3

とができる。すなわち、

$$D = [D_t, D_c] \dots\dots\dots(5.1)$$

図-3 (1) のグラフについては、

$$D_t = \begin{matrix} n_1 \\ n_2 \\ n_3 \\ n_4 \end{matrix} \begin{matrix} e_1 & e_2 & e_3 & e_4 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ -1 & -1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & -1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & -1 \end{matrix} \begin{matrix} n \\ n \end{matrix}$$

$$D_c = \begin{matrix} n_1 \\ n_2 \\ n_3 \\ n_4 \end{matrix} \begin{matrix} e_5 & e_6 & e_7 \\ -1 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & -1 \end{matrix} \begin{matrix} n \\ m \end{matrix} \dots\dots\dots(5.2)$$

$D_t$  は正則行列である。

ループの正方向を時計方向にとるものと約束する。そして、コードに含まれる枝路の方向づけはループの正方向に一致するようにとると都合がよい。基本ループ ( $l_1, l_2, l_3$ ) に関するものを基本ループ行列といい、 $L$  で表わす。 $L$  もトリーに対応する  $(m, n)$  型行列  $L_t$  と  $m$  次正方行列  $L_c$  に分けられる。そして、 $L_c$  は単位行列  $I$  になるので、次のようである。

$$L = [L_t, I] \dots\dots\dots(5.3)$$

図-3 については、

$$L_t = L_1 \begin{matrix} e_1 & e_2 & e_3 & e_4 \\ -1 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & -1 & -1 & -1 \end{matrix} \dots\dots\dots(5.4)$$

基本カットセット行列は 図-3 (3) に示す基本カットセットに含まれるコードを行に選ぶ。基本カットセット行列  $C$  は、トリーに対応する  $n$  次正方行列  $C_t$  とコードに含まれる  $(n, m)$  型行列  $C_c$  とに分けられる。そして、 $C_t$  は単位行列  $I$  となる。

$$C = [I, C_c] \dots\dots\dots(5.5)$$

図-3 (3) については、

$$C_c = \begin{matrix} c_1 \\ c_2 \\ c_3 \\ c_4 \end{matrix} \begin{matrix} e_5 & e_6 & e_7 \\ 1 & -1 & 0 \\ -1 & 0 & 1 \\ 0 & -1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 \end{matrix} \dots\dots\dots(5.6)$$

となる。

(2) トリー行列とコード行列

トリー行列  $T(t_{ij})$  は、節点を行に、枝路を列に対応させ、要素  $t_{ij}$  は  $t_{ij}=1$  なるときは、指定されたトリーにそって基準節点  $n_0$  から節点  $n_i$  に至るパスに枝路  $e_j$  が含まれ、進路と同一方向を向いている、

$t_{ij}=-1$  なるときは、同じく反対方向を向いている、  
 $t_{ij}=0$  なるときは、枝路  $e_j$  がそのパスに含まれない、  
 ような場合に相当する。 $m$  箇のコードはパスに含まれないので、トリー行列  $T$  は

$$T = [T_t, 0] \dots\dots\dots(5.7)$$

ここに  $T_t$  はトリーに対応する  $n$  次正方行列で正則である。

図-3 については、

$$T_i = \begin{matrix} & e_1 & e_2 & e_3 & e_4 \\ n_1 & \begin{pmatrix} 1 & -1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 1 & 1 \end{pmatrix} & & & \end{matrix} \dots\dots\dots (5.8)$$

コード行列  $B(b_{ij})$  は、コードを行に、枝路を列に対応させ、要素  $b_{ij}$  は

- $b_{ij}=1$  なるときは、枝路  $e_j$  がループ  $l_i$  に属するコードに含まれていて方向が同じ、
- $b_{ij}=-1$  なるときは、同じく方向逆
- $b_{ij}=0$  なるときは、枝路  $e_j$  がループ  $l_i$  に属するコードに含まれない場合になる。

すると、コード行列  $B$  は次のように分けられる。

$$B = [0, I] \dots\dots\dots (5.9)$$

ここに単位行列  $I$  は  $m$  次である。

(3) 基本行列の性質

Poincaré の定理により、3つの基本行列の間に次の直交性が存在する。

$$DL^T = 0 \text{ (} n, m \text{) 型, } LD^T = 0 \text{ (} m, n \text{) 型} \dots\dots\dots (5.10)$$

$$CL^T = 0 \text{ (} n, m \text{) 型, } LC^T = 0 \text{ (} n, m \text{) 型} \dots\dots\dots (5.11)$$

また、式 (5.7) と (5.1) から明らかに

$$DT^T = D_i T_i^T = -I \dots\dots\dots (5.12)$$

ここに、 $I$  は  $n$  次の単位行列である。

式 (5.1), (5.3), (5.12) を式 (5.10), に用いると

$$L_i = D_c^T T_i \dots\dots\dots (5.13)$$

式 (5.3), (5.9) から

$$BL^T = LB^T = I \dots\dots\dots (5.14)$$

ここに、 $I$  は  $m$  次単位行列である。最後に

$$BT^T = 0 \text{ (} m, n \text{) 型, } TB^T = 0 \text{ (} n, m \text{) 型} \dots\dots\dots (5.15)$$

これらの性質を利用して、複雑なグラフを分割して、計算の簡単化をはかることが考えられる。すなわち、グラフをいくつかのトリーのための Subgraph とコードのみの Subgraph に分割するのがその一つの方法である。

トポロジーの構造解析への適用については、下記文献を参考にされたい。

参考文献

- 1) E.クライツィグ, 田島一郎・近藤次郎共訳: 線形代数と応用解析, 技術者のための高等数学, 第2巻, 培風館.
- 2) 島田静雄: 土木応用数学, 大学講座土木工学1, 共立出版
- 3) 佐竹一郎: 行列と行列式, 数学選書1, 裳華房
- 4) Faddeev, D.K., and V.M. Faddeeva: Computational Method of Linear Algebra, Freeman and Co., Publishers, 1963
- 5) Bellman, Richard: Introduction to Matrix Analysis, McGraw-Hill, 1960
- 6) McMinn, S.J.: Matrices for Structural Analysis, Spon, London, 1962
- 7) Zurmühl, R.: Matrizen und ihre technischen Anwendungen, Springer, 1964
- 8) Ralph, R. Mozingo: Matrix Distribution, Proc. ASCE Vol. 94, ST, April, 1968
- 9) Huang, Chao: Uncoupling Method for Diagonal-Band-Matrix Equation, Proc. ASCE Vol. 93, EM, August, 1967
- 10) Ting, T.C.T.: A Method of Solving a System of Linear Equations Whose Coefficients Form a Tri-Diagonal Matrix, Quart. of Applied Mathematics, Vol. 22, No. 2, July, 1964
- 11) Kosko, E.: Matrix Inversion by Partitioning, The Aeronautical Quarterly, May, 1957
- 12) Zurmühl, R.: Matrizenverfahren zur Behandlung von Biegeschwingungen nach der Deformationsmethode, Ingenieur-Archiv, Bd 32, 1963
- 13) Jennings, A., and Majid, K.I.: The Computer Analysis of Spaceframes Using Sparse Matrix Techniques, Proc. the International Conference on Space Structures, 1966
- 14) Di Maggio, F.L.: Statical Indeterminacy and Stability of Structures, Proc. ASCE, Vol. 89, ST, 1963
- 15) Spillers, W.R.: Applications of Topology in Structural Analysis, Proc. ASCE, Vol. 89, ST, 1963
- 16) Fenves, S.J.: Structural Analysis by Networks, Proc. ASCE, Vol. 92, ST, 1966
- 17) Koepsell, P.E.: Convergence of Matrix Carry-Over Procedure in Planar Structures Loaded Normal to the Plane, Ph. D. Thesis, Oklahoma State University, Stillwater, 1965
- 18) Denke, P.H.: Matrix Structural Analysis, 2nd National Congress of Applied Mechanics, June, 1954
- 19) Langefors, B.: Algebraic Topology for Elastic Networks, SAAB TN 49, April, 1961
- 20) Henderson, J.C.: Topological Aspects of Structural Linear Analysis, Aircraft Engineering Vol. 32, No. 37, May, 1960

[新数学講座・終]

改訂小委員会編 **海岸保全施設設計便覧** 改訂版

A 5 294 ページ・上製・図表, 写真多数

定価 2300 円 会員特価 2000 円 (〒100 円)

第1章 海岸における水理現象/第2章 海岸調査/第3章 設計法 に分け, 全24節の大便覧。そのほか付表・索引・資料広告をおさむ。